



Title	共生と共創
Author(s)	志水, 宏吉
Citation	未来共創. 2020, 7, p. 328-331
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/76166
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

共生と共創

志水 宏吉

共生と共創。この短いエッセイでは、この2つの言葉をめぐる私自身の、現時点での思いを記しておきたい。

なお本号には、このジャーナルの名称が『未来共生学』から『未来共創』に代わった経緯についての、本研究科（大阪大学人間科学研究科、以下「人科」）渥美公秀教授（本誌編集長）の文章が掲載されている。また、栗本英世教授による「共創」というテーマに関する巻頭論文も収められている。さらに投稿論文のなかには、共生と共創との関係というテーマに関する、本学院生である桂さんによる野心的な論稿もある。詳しくはそれらの文章を参照されたい。

私が「共生」という言葉についてまともに考え始めたのは今から9年ほど前のことである。当時の平沢安政研究科長からのサジェスチョンで、文部科学省博士課程教育リーディングプログラム・多文化共生分野への申請の旗振り役を務めることになった。その理由は、第一に、私がいわゆる「ニューカマー」と呼ばれる外国にルーツを持つ子どもたちの教育問題に取り組んでいたこと、第二に、身近にいたので単に声をかけやすかったこと、の2点だと思われる。

首尾よく審査にパスし、2013年度から本学の未来共生プログラムが立ち上がることになった。本誌『未来共創』の前身は、上にもふれたように、そのリーディングプログラムの機関誌としての性格を持

つ『未来共生学』である。ちなみに、「未来共生」という語の産みの親は、当時の言語文化研究科長・木村茂雄先生である。打ち合わせの会で、ただの「共生学」ではいささかインパクトに欠けるなという話になった際に、「未来共生なんてどう？」とおっしゃった。それで決まった。

私たちが勤務している人科では、4年前（2016年度）にかなり大きな組織改編を行った。その改革の二本柱が、共生学系および未来共創センターの創設である。そのうちの一本目の柱（＝共生学系の創設）については、私自身が一定の役割を果たしたと考えている。第一に、七年間で事業期間終了となる未来共生プログラムの持続可能性確保のために組織的裏づけをつくる必要があると考えたこと、第二に、2007年の大阪外国語大学との統合をきっかけとして成立した本研究科大学院の二専攻体制は二重構造的、ある意味差別的であり、改めなければならないと感じたこと。上の二つの理由から私は共生学系という新ユニット創設に動き、それを実現することができた。「未来共生学」と「グローバル共生学」という現在の講座名は、私が言い出しっぺである。

もう一つの柱（＝未来共創センター）の創設については、私は何の役割も果たしていない。当時の中道正之研究科長、栗本副研究科長のイニシアチブで、センターの設立が企画・推進されていた。その私が、二代目のセンター長を務めさせていただいたのは、運命の巡り合わせだと言ってよい。任期（2018～19年度）もようやく終了、ようやく肩の荷を下ろすことができたと感じている。

いささか前置きが長くなってしまった。本題は、共生と共創の関係である。

「共に生きる」と「共に創る」こと。上記のような経緯で、人科に「共生」と「共創」が生まれた。いわば双子のようなものである。名前のよく似た双子。しかし、性格はずいぶん違うようでもある。両者の関係をどのように位置づければ、しっかりと来るだろうか。顔の似た「双子ちゃん」を見分けるポイントは、どこにあるのだろうか。

いつの頃からか、そんなことを考えるようになった。もちろん、多くの関係者が、同じ問いに思いをめぐらせているに違いない。

私が気づいたのは、「生きる」は自動詞であり、「創る」は他動詞であるということだ。

まず共生について言うなら、未来共生プログラムを推進してきた私たちは、理想とする共生のあり方を、「 $A + B \rightarrow A' + B' + \alpha$ 」という図式で捉えようとしてきた。この時、Aは社会のマジョリティであり、Bはさまざまに想定されるマイノリティ（複数）である。望ましい共生のあり方とは、両者の出会い・相互作用によって、「Aも変わる。Bも変わる。そして新たな価値なり制度なりが生まれる」というものである（この図式は、先に登場した平沢先生の発案による）。言い換えるなら、共生とは、それぞれの生を送る個人なり集団なりがかかわり合い、新たな社会をつくっていくことである。差別・抑圧が支配する関係、相互に切り離された生を送る関係、時に傷つき、傷つけることもある関係、相互依存によって何とか生き延びようとする関係……。いろいろな関係がありえるが、私たちは、「お互いがお互いに敬意を払い、それぞれの違いを超えて共に生きていくこと」を本当の意味での「共生」だと考えている。その意味において、共生は、理念であり、理想像である。

一方の共創であるが、「共に創る」と言ったときに、即座に浮かんでくるのが「何を創るのか？」という問いである。共創という日本語は、どうやら産業界で使われ始めた言葉のようであるが、その際に「創る」ことが想定されているのは、端的に言って新製品や新しいサービスである。また、ビジネスの世界では「新たな価値を創造する」といった言い方がなされることも多い。他方、大学においても共創という語は、近年のはやり言葉の一つとなっている。大阪大学では、それぞれの学問領域で深められていく知を「専門知」、領域を超えて産み出される知を「統合知」、そしてそれら大学の知と社会のさまざまな場所に形成されている現場の知・実践の知の相互作用から生じる知を「共創知」と名づけ、その3つのタイプの知の創出を大学の使命だと

位置づけている。

また、私がセンター長を務めたのは、附属未来共創センターである。この場合、共創するのは「未来」ということになる。

結論を急ごう。

いろいろ思いをめぐらせているうちに、次のことにハタと気づいた。「そうか、私たちが共創しようとしているのは、理想の共生社会だと考えればうまく辻褄が合うのでは！」と。大学人が社会のさまざまな人々と共に創り上げていくべきは、本当の意味での共生社会なのではないか。その時、「共生」は創るべきもの(what)であり、「共創」はそのやり方やプロセス(how)を指す。つまり、共生と共創の関係は、whatとhowの関係なのである。納得していただけるであろうか。